

# 金閣寺

映画文学人生論

原作：三島由紀夫 (1956) 「新潮」

参考：『炎上』監督：市川崑 (1958) 脚本：和田夏十

出演：溝口吾一 市川雷藏 長谷部慶次  
芦刈 (柏木) 仲代達也 撮影：宮川一夫  
老師 中村鴈治郎 音楽：黛敏郎  
母あき 北林谷栄

美というものは、そうだ、何と云ったら  
いいか、虫歯のようなものだ

三島由紀夫の『金閣寺』は若い頃、読んだこと  
があるが、よくわからなかった。

たとえば、柏木が「美というものは、そうだ、  
何と云ったらいいか、虫歯のようなものなんだ」  
という。気の利いたセリフのようで、面白いけれ  
ども、どう考えても虫歯が美とは思えない。

主人公の溝口が金閣寺に放火する行為も美とか  
かわりがあるという。美の意識が美の対象に放火  
するという行動に私はついていけそうもない。

ところが、こんど市川崑監督の映画『炎上』を  
観ているうちに、いつのまにか主人公に感情移入  
しているのに自分ながら驚いた。おそらく放火の  
動機が美への観念的陶醉だけでなく、どもりの少  
年の暗い過去、母親への反発、住職への憎しみな  
どの複合的な要素にも根ざしていることが伝わっ  
てきて、情緒的に納得したからだろう。

あらためて、原作を読むと、こんどは少し理解  
が進んだような気がした。私に関するかぎり、映  
画が原作の理解にある程度は役立ったといえる。

溝口の父親は田舎の僧侶で、彼の幼いころから  
よく、金閣のことを語った。「金閣ほど美しいも  
のは此世にはない」。それを聞いて、彼はまだ見  
ぬ金閣の美しさについて想像をふくらませ、小さ  
な夏の花を見ても、美しい人の顔を見ても、「金  
閣のように美しい」と形容するようになった。



# 金閣寺

映画文学人生論

しかし、父親に連れられて現実の金閣を見ると失望した。美というものは、こんなにも美しくないものだろうかと思つたが、やがて戦争で京都も空襲のおそれが出てくると、自分を焼き亡ぼす火が金閣をも焼き亡ぼすだろうという考えが彼をほとんど酔わせた。美と彼を結ぶ媒立（なかだち）がやつと見つかったという。そこまではわかる。しかし、現実には、終戦の日まで京都は空襲を受けなかった。彼は美を追究するためには自分で金閣に火をつけるしかないと思ひ込む。

終戦の日、老師は「南泉斬猫」の講話をした。子猫をめぐって寺中が争つていると、南泉が子猫の首をつかみ、「大衆道（い）ひ得ば即ち救い得ん。道ひ得ずんば即ち斬却せん」と言つた。誰も答えなかつたので、南泉は草刈鎌で子猫を斬つて捨てた。そのあとで高弟の趙州が帰ってきてその事を聞くと、趙州は頭に履（くつ）を載せて出て行つた。「お前がいたら、あの子猫も助かつたのに」と南泉は言つたという。わけのわからない難解な禅問答だ。

昭和四十五年、三島由紀夫は自衛隊の決起を呼びかけた後に割腹自殺した。行動の拠り所は陽明学だが、禅問答や陽明学が金閣寺への放火とどう結びつくのか、これもわけがわからない。

虫歯抜き猫を殺して寺を焼け